

Face to Face



TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。

地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター

No.37 2014年7月号

ザンビア体験記

今年の春、ザンビアを訪れた学生たちが感じたそれぞれの思いを紹介します。

👉p.2-3

TICOザンビアの活動報告

皆様からご支援いただいた寄付金の使途や母子保健事業について、報告します。

👉p.4-5

TICO初代代表を訪ねて

初代TICO代表を務められた白石先生にお会いするため、島根県隠岐島を訪れました。

👉p.6

カンボジア便り

3月に保健医療専門家がカンボジアへ渡航しましたので、報告します。

👉p.7



バーゲンセール開催中！ではなく、TICOが作成した施設でのお産を啓発するメッセージ付カレンダーを地域のボランティアさんが配布している様子です。押さないで～



日本大学歯学部4年 曾根 久勝

郡病院は、ヘルスセンターやヘルスポストに比べて規模が大きかったのが印象的だった。中でも歯科治療室があったことに驚いた。またザンビアに来る前には歯科用ユニットが無く、椅子の上で治療を行っているイメージだったので、きちんとした歯科用ユニットはもちろん歯科で使う器具が揃っていたことにも驚いた。しかし、そこで一番多く治療される方法は何かと聞くと抜歯であると答えてくれた。個人としてはユニットもあり、ある程度の機材がそろっているにもかかわらず歯を抜いてしまうのはなぜだろうという疑問が浮かび上がった。口腔ケアが後回しになっているのではないかと思った。今まで歯科医は近隣の国から来ていたそうだが、数年前にザンビア初の歯学部が設立された。そう考えると歯学部設立というのはザンビアにとって

大きな事であり、歯への意識や考えが変わって来ているのではないかと思った。

ザンビアで起こっている事、医療現状というのを知ることが出来てとても良かった。

甲南大学経営学部3年 友金 輝幸

村での滞在で一番印象深い出来事は、鶏の首を目の前で切り落とし夕飯にして頂いたことだ。日本で生活していると、このような経験をする事はまずないので食べ物へのありがたさを改めて感じた。

それから、私が一番聞きたかった「あなたにとって一番大切なものは何ですか？」という質問をすると、受け入れ家庭のお父さんであるマイクは、「メイズ*畑」と答えた。メイズ*は、自分たちの食べ物にもなるし、家畜のえさにもなる、メイズ*を売るとお金も得ることができるからだ、とおっしゃっていた。もし、「日照りが続くとうどうなりますか？」と聞くと、「大変なことになる」と。自給自足の生活を、実際自分の目で見るととても羨ましい面もあるが、こういった点から大変なこともあるのだなと感じた。

日本では味わえない体験ばかりでとても刺激的な3日間であった。アフリカというと、あまり良いイメージを抱かない方が日本には多くいると思うが、私が実際現地で過ごしてみて、思い込みだけで判断することはとても恐ろしいことだと感じた。村で滞在した期間は3日だけだったが、そこで得た経験を日本に戻った今、どう還元していけばよいかということを考えている。

ザンビア体験記

IFMSA-JAPAN（イフムサ：国際医学生連盟－日本）に所属する学生5名が、TICOの活動地にて、病院見学やビレッジステイなどを体験しました。それぞれのメンバーから感想が届きましたので、ご紹介いたします。

岐阜大学医学部4年 上谷 遼

村の人々が、自然との共生をしている姿を感じられたことが印象的であった。朝は日の出と共に起床し、昼間は自分たちの生計を立てるためにメイズ*畑で仕事をし、夜は暗くならないうちに夕飯の準備を始め、そして日が暮れてしばらくしたら就寝して、1日が終わる。このサイクルは人間にとって生来の自然なものであり、私たち先進国の人間にとっては忘れ去られた先史的な暮らしであると思う。それでも受け入れ家庭のお父さんに「電気や水道が届いてほしいか？」と聞いたら、「欲しい」と答えた。国際協力において、先進国の押しつけにより必要のない支援をしてしまうことが多々あるため、必要以上の支援はする必要がないとの意見をしばしば耳にするが、やはり需要は存在しており、それに対してアプローチしても良いのかと少し安心した。



また、私は国際理解教育に興味があり、青少年育成のために国際社会や世界各地で生きる人々を知ることが重要であると考えている。今回は日本食を持参し、夕食に家族の皆へ振舞った。五目ご飯は不味かっただろうが、「美味しい」と言ってもらえた。いつもは日本での国際理解の必要性を考えていたが、これも国際理解の一つなのだと新たな気づきを得られた。

東北大学医学部2年 櫻井 芳騎

発展途上国へ援助をする際、持続可能なシステムを作ることがどんなに大切か実感した。TICO合宿にて間伐材をウッドチップに変えたり、自分たちが野菜を収穫したりしているのを見たときは凄いという感想だけで、なぜここまでも持続可能な社会にこだわるのか正直ピンと来ていなかった。しかし、実際に現地で行ってみると「魚を与えるのではなく、釣り方を教える」ことがいかに大切か実感した。与えるだけで使い方や修理方法を教えないと、結局「もらうだけ」になってしまう。さらに、乳幼児健診の運営が現地のスタッフによってすでに成し遂げられていて本当に驚いた。母親たちが大勢集まり和気あいあいと会話を楽しんでいる様子は乳幼児健診が彼女らの生活に溶け込んでいることを語るのに十分だと思う。

今回、発展途上国への援助を考える際パターンナリズム**について何度も考えた。乳幼児が死なないようにすることは絶対的な善だと考えたこともあったが、結局のところ自分の常識の中で「絶対的」だと考えているだけで、個人の考えの範疇からは出ていない。彼らにとって幸せとは何か。何が正しいのか。もしかすると、釣り方を教えてもらわなくても定期的に魚をもらえるのなら、現地の人はそのことをうれしく思い幸せに感じるかもしれない。しかし、それは正しいのか、正しくないのか。簡単に答えが出ることとは思えないが、国際協力というものに関わりようとしている以上妥協せず思考し続けていきたい。

*メイズ：白とうもろこし、ザンビア人の主食であるシマの原料。

**パターンナリズム：父親的温情主義、個人の要求に応じているように見えるが、権威を崩さずに逆に個人の自由や責任を無視するような行動を指す。

村で過ごした3日間はとてもゆっくりと時間が流れ、一日中自然に囲まれていて心地よかった。舗装された土地で夜遅くまで人工の明りに照らされて暮らす日本での生活に比べ、うらやましくさえ思った。

この生活を壊してはならない、壊したくない。先進国の価値観で発展を押し付けたらそれはこの人たちにとっては必ずしも幸せではない。しかし、個人や国民の価値観にかかわらず支援できることもあると感じた。例えば、日本などの先進国に比べ、依然として乳幼児死亡率や妊産婦死亡率が高く、平均寿命が低いことにも関連している。生活様式に関しては何をもって幸せと捉えるかには差が生じるが、生き死にに関して、より長く生き延びられたほうがよいということはある程度普遍的に受け入れられると考えられる(終末期の医療などに関しては別の問題である)。現地の医療施設を見学させていただき、衛生状況や医療機器などに関する認識の甘さを感じる場面があった。

また、TICOの支援している乳幼児健診を見学させていただいた。TICOの支援の下ではあるが、現地の人たちの手によって乳幼児や母親をサポートする体制が整いつつある。今はまだ住民だけでまかなうのは難しいとのことだったが、将来的には現地の住民の手によって運営を定着させてほしい。ボランティアの方たちの熱意はそれを十分に期待させる。

生まれ育った土地、国とは全く違う環境を体験することで、その土地に見合った発展の重要性を感じた。必要とされるものは場所により全く違う。そのためにはその土地のこと、住民のことを理解していなければならない。くしくも異国の地で故郷の地域医療に思いを馳せた。あらためて自分の周りを見つめなおしながら、ザンビアのために、自分に何ができるか模索していきたい。



今回は珍しく男子学生のための派遣メンバー

TICOの寄り添う支援

TICO 代表 吉田 修

先月、久しぶりにザンビアを訪れた。

「先生、またおらんかったなあ。しょっちゅうアフリカ行くとるんやなあ。」
少しでも診療所を留守にするとこんな風に患者さんに言われる。それはさて置き、

「先生、アフリカでも患者さん診よんじやなあ。」

「いや、診よれへんよ」
ここから説明するのが面倒である。私もTICOザンビア事務所に駐在しているスタッフも診療しているわけではない。お金や物をどんどんあげるわけでもない。さて、はるばるザンビアまで行って何をしているのだろう。これがなかなか説明しにくい。

現地の人達と一緒に、見る、歩く、話し合う、行政と折衝する、段取りする、つくる。どうしても足りないものは支

援する。日々、細々とした地味な仕事の積み重ねである。私は、たまに行ってTICOのボス面をして関わりのある皆さんと挨拶をするのである。これは楽だ。

しかし、現場のスタッフは大変である。例えば、電気も水道もない村での幼児や妊婦の健診、予防接種に1日付き合うと、様々な問題点が見えてくる。ヘトヘトになりながら保健ボランティア達と改善策を話し合う。村のボランティア達はもっともって大変だ。彼らも貧しい農民であるが、農作業に当てる時間を割いて無償で活動している。まず、前日には出張健診(5ページ参照)が行われることを村人に伝える。当日は早朝から自転車2台でガタボコ道(遠い所は2時間以上かかる)、橋のない川を幾つか渡り、診療所の看護師を迎えに行く。ワクチンや台帳、看護師を自転車の後ろに乗せ、また来た道を戻って行く。何十人もの子供の健診、問題のある子供への対処、未接種のワクチンを確認し、するべきワクチンを接種す

る。それから妊婦の健診、家族計画の指導を行う。書類や機材を整理し、診療所までまた看護師を自転車で送って行く頃にはもう夕暮れである。そんな苦勞を理解した上で、寄り添って支援していく。

TICOの季刊誌「Face to Face」にあるように顔と顔を付き合わせて、寄り添う支援がTICO流である。



よしだ・おさむ：自称兼業農家(外科医)
徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在吉野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。
写真は、ルサカ市ンゴンベ貧困地区民生改善事業の裁縫教室の人たちと。

TICO奨学金の対象となる学生30名が決定！

瀬戸口 千佳（業務調整員）

前号（2014年4月発行、36号）にて昨年度対象の奨学生についてお知らせしましたが、今年度は徳島県吉野川市立森山小学校に加えてTICOユースが自主イベントで集めた寄付金や個人からの寄付も合わせて、対象者数を昨年度の10名から30名へと大幅にアップし、また支援額も一部支援（3000円）から全額支援（5400円※昨年度より値上がり）へと拡大することが出来ました。奨学生を代表し、厚く御礼申し上げます。

ザンビア募金☆進捗報告

マケニ・コミュニティスクール改良換気型トイレ設置 (マケニ村)

3棟のうち2棟が完成しました！収穫期が終わり次第、3棟目の設置に取り掛かる予定です。

建設を主体的に進めてきた住民保健委員会のメンバーは「『この村ができて以来、こんなちゃんとしたトイレが建ったのは初めてで誇らしい。』と村の人に言われたんだ。資材を寄付してくれた人たちとTICOには本当に感謝している。」と話してくれました。



▲完成した2棟のトイレ

橋の建設（NPO法人道普請人との連携）

ムエンバ地区とマケニ地区の境界に流れるモンボシ川は、箇所によっては乾季でも水の流れの絶えない大きな川です。そこに幅30メートルの橋をかけるべく、去年からNPO法人道普請人との連携のもと、準備を進めてきました。8月からの本格的な作業に向けて、村ではすでに作業が始まっています。



▲昨年2月頃のモンボシ川。水量が多い時期には人が流される被害が生じることも。



▲すでに地域住民による作業が開始されています。

他の二地区からも橋建設の要望が出ていますが、規模としては比較的小さいため、このムエンバ-マケニ間の橋建設作業に加わってもらうことによって、橋建設のノウハウを学んでもらう予定にしています。

地域からは引き続き要望が上がってきており、目下厳正なる審査中です。次号にて詳細をご案内する予定ですので、お楽しみに！

チサンバ郡 総合的な農村母子保健を支える "地域力"強化事業

竹村 俊男（コミュニティ活動専門家）

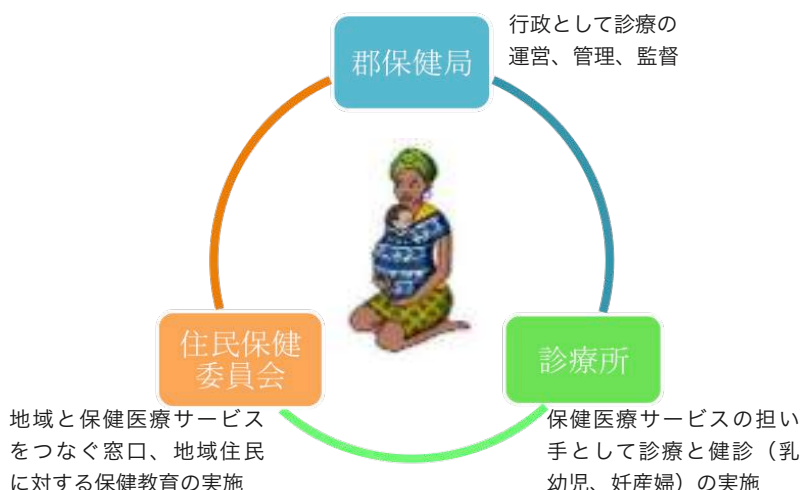


子どもの体重を測るために並ぶお母さん達

モンボシ地域には9つの住民保健委員会があり、それぞれ15名程度のメンバーが所属しています。住民保健委員会は、地域と保健医療サービスをつなぐ窓口となることが期待されており、その活動の主要なものとして「出張健診」があります。出張健診では、月一回、住民保健委員会のメンバーと診療所のスタッフが協働して、保健教育、子供の体重測定、予防接種、妊婦の健診、家族計画サービス、栄養カウンセリングなどを行います。場所によっても異なりますが、50組から100組近いお母さんと子どもが参加するため、昼前から夕方近くまでかかります。それにも関わらず、無給で地域のために働く住民保健委員会のメンバーの姿には、尊敬の念を抱かずにはいられません。出張健診以外にも、住民保健委員会は地域の保健状況の確認を行うための月1回のミーティング、診療所への報告書の作成、住民への必要な物品（蚊帳など）の配布、など、多くの役割を担っているのです。

一方で、住民保健委員会を取り巻く課題は多くあります。活動に積極的でないメンバーもあり、残念ながら多くの住民保健委員会では上記の役割を十分に果たすことが出来ていません。また、住民保健委員会はその傘下のボランティア（前回のプロジェクトで養成したSMAG（スマッグ：安全な妊娠／出産を支援するための地域住民によるボランティアグループ）もそのうちの一つ）の監督を期待されていますが、住民保健委員会はその役割があることを十分に認識していません。さらに私が一番の課題として考えているのが、「住民保健委員会の策定する活動計画が形だけのものになっている」ということです。

しかしながら、彼ら自身だけでは地域において必要かつ実行可能な計画作りは難しいのが現状です。



最後の課題への対策として、まずは住民保健委員会のメンバーと共に地域の現状を把握するための調査を行うことを予定しています。TICOが一方向的に考えた調査を実施するのではなく、住民保健委員会、診療所、郡保健局というパートナーと共に、調査の計画、実施、分析、アクションプランの策定、モニタリングというプロセスと一緒に歩んでいきます。それこそが、プロジェクト終了後でも持続可能な"地域力"を身につける重要なステップだと考えています。

2014年4月から開始されている本事業は、JICA（国際協力機構）から「草の根技術協力事業」として委託を受けて実施しています。

猫目線



日増しに空気の乾燥を感じるルサカから猫のチャイがお送りします。

6月6日（日本時間6月7日）に開催されたサッカーの国際親善試合日本対ザンビア戦はご覧になりましたか？辛くも日本

が4-3で勝ちましたが、この試合で日本でのザンビアの知名度はぐっと上がったのではないかと期待します。

ザンビアの人たちはサッカーが大好きで、今のザンビアで一番有名な日本人はプレミアリーグ・マンチェスター・ユナイテッドFCで大活躍中の香川真司選手だと思います。ご主人が日本人だとわかると、だいたい日本車の話か香川選手の話がされるとか。

また今年はザンビア独立50周年と合わせて、日本との国交樹立50周年でもあります。それを記念して、先日、皇室から秋篠宮ご夫妻がザンビアを訪れたのですが、まさかのご主人もザンビアで皇室の方々と会うことにはなるとは思っていなかったようでした。

これからも日本とザンビアの友好関係が末永く続きますように。ニャー。

TICO初代代表を訪ねて～島根県隠岐島へ～

TICOは昨年11月に20周年を迎えました。設立当時に代表を務めておられた白石先生にお会いすることは、一つの節目のようにも感じられました。新緑が眩しい2014年の4月下旬に隠岐島を訪れました。

近森 由記子（事務局職員）

▲隠岐を代表する絶景の国賀（くにが）海岸

白石吉彦先生は徳島のご出身。自治医科大学をご卒業された後、徳島の病院で勤務されている時にTICO初代代表（1994年から1998年までの約4年間）を務められた方です。その後、島根県へ移られ、今では隠岐広域連合立隠岐島前病院の院長として離島医療に邁進されておられます。その取り組みは、赤ひげ大賞を受賞するなどメディアでも大きく取り上げられています。

島根県の七類（しちるい）港まで行くため、早朝に車で出発、七類港からは隠岐汽船のフェリーで約3時間、徳島から約7時間かけて隠岐島前別府港へ到着しました。お出迎え頂いた白石先生の傍らにはなにやら大きなTVカメラをもった大きなカメラマンが。聞くとところによると、白石先生の密着取材をされているとのことでした。また、院長室には、白石先生が

取り上げられている雑誌がずらりと並べられており、改めて有名な方であることを実感しました。

現病院の院長となられたのが35歳の時。それから十数年間の種まきの成果が今、形になって現れてきている、まさにそんな雰囲気か病院にはありました。今では、島の病院では珍しく看護師の数が足りているようで、さらにIターンの方も多くいらっしゃるとのことですが、一時は看護師の数が足りない危機的状況に陥ったこともあったそうです。それでも、今このように注目されているのは、オリジナリティを持ち、分かりやすく発信し、そして種まきを怠らないことを徹底されているからだそうです。

また、救急—治療—福祉—保健を一つにつなぐ地域医療を目指し、関係者を集めたミーティングを定期的に開催し情報を共有するなど、途切れのない医療を実践されています。「ないものはない」と割り切りつつも、用意できるものは最新の機器を導入するなど、島の人々のために、島の人々を巻き込んで病院のスタッフと共に地域医療を実践する姿はTICOのゼンビアでの活動に通じるものを感じました。

それから、待合室で診療を待つ患者さんとお話をすることができました。患者さんの目には、離島医療で有名な白石先生ではなく、隠岐島前病院の白石先生の姿でした。今日も当たり前の医療がそこにあること、そして、それを持続させることがいかに重要であり、また大変であるということをひしひしと感じた瞬間でした。



隠岐広域連合立隠岐島前病院

「日常を支えながら、非日常に備える」白石先生の言葉がとても印象的でした。

国際協力と地域医療、一見全く異質なもののとして捉えがちですが、そこに住む人のため、そして、そこに関わるスタッフのため、環境を整え、体制をつくることは同じであると思います。もしかすると、総じてこの世の理は同じなのかもしれません。継続して実践しておられる白石先生の姿から信念を持って取り組むことの重要性を教えてくださいました。

今回の旅では、継続して発信することの大切さと、仕組みづくりの担う重要度の高さを改めて認識することができました。当たり前のことだと言われるかもしれませんが、再認識出来たことがとても意味のあることだと思っています。

白石先生をはじめ、奥様、4人のお子様達そして病院のスタッフの皆様には、今回の訪問を快く受け入れていただき厚く御礼を申し上げます。



白石吉彦先生と奥様の白石裕子先生



30年以上大事にされている愛車

お知らせ

離島医療の経験が詰まった医学書とは一味違う、一般の方にも読み応えのある一冊です。

著者：白石佳彦・裕子

発行所：中山書店

定価（本体3,500円＋税）



カンボジア便り

渡部 豪（保健医療専門家）



研修のようす

2014年3月、高松市と公益社団法人セカンドハンドとの協働で実施されているJICA草の根地域提案型事業により高松市消防局の救急救命士である濱崎氏、岡本氏、それにセカンドハンドの新田氏とともに、カンボジア国スバイリエン州に赴き、救急医療研修を実施してきましたので報告します。

3病院にて医療従事者対象の研修会を開催

日本の外傷治療の研修コースであるJPTEC（日本救急医学会公認の病院前外傷教育プログラム）の内容を基にした研修を行いました。州の3病院と州保健局から先生、看護師等18名の参加を得ました。外傷救護に関して、1)外傷発生地点到着時の状況評価、2)初期の傷病者観察、3)全身観察の方法について講義した後、高松市消防局の濱崎氏、岡本氏から模範的対応をデモンストレーションしてもらいました。続いて、参加者にも順次実演してもらいました。参加者は大変熱心な受講ぶりで、この地域でこのような実

践的な研修がほとんど行われていないことが伺われました。救急のABC、初期評価などの概念の理解が不十分であり、病院前救護活動、救急車内活動をほとんど経験していないことが分かり、今後の課題としてとらえています。

3病院の視察

州にある3つの公立病院を視察しました。救急に関する物品不足は驚くものがありました。救急車内には酸素ボンベとストレッチャーしかなく、傷病者の固定や観察は極めて困難です。安全な救急搬送、実際に救命につなげる救急搬送にはバイタルサイン測定や固定のための道具等最低限の装備を早急に導入する必要があると強く感じました。

住民に対するファーストエイド（応急手当）講習を開催

プノンペン市の先生2名によるハンドブックや蘇生人形を用いたファーストエイド講習を行いました。異物を間違って飲み込んだ時の対応については、特に熱心に実技指導を受けていました。この講習を実施したプノンペン市の先生2名は、これまでの香川県、セカンドハンドの事業により日本に招へいし研修を受けたことがあり、TICOの事業においても教育者としてのトレーニングを受けています。今回、その成果を確認することができました。今後、彼らが自国内の指導者として成長してくれることを願います。



講習のようす

着任の
ご挨拶

出浦 綾夏
(インターン)

皆様、はじめまして。5月から9月末までTICOのザンビア事務所にてインターンをさせて頂く看護師の出浦綾夏です。

東京で大学病院のNICU（新生児集中治療室）にて3年間勤務をしていましたが、大学時代から国際保健に憧れており、このたび退職を決意し、TICOの活動に参加させて頂くことになりました。

ザンビアには学生の頃に1度訪れた事があり、自然の豊かさや、エネルギーあふれる人々との関わりがとても印象に残っています。再びこの地を踏めることがとても嬉しく、4ヶ月という期間の中で地域の人々と深く関わることを楽しみにしています。

初めての海外長期滞在なので不安もありますが、多くの事を学ばせて頂きたいと思っています。

どうぞよろしくお願い致します。



お茶摘み体験（国内研修の一環にて実施）

事務局長 福士庸二のつぶやき

TICO合宿と農業体験

TICOの国内活動ではお馴染みのTICO合宿。合宿期間中の食事は、自炊が基本。食卓には、代表吉田の畑からの野菜も加わる。季節ごとに味わう野菜の種類もさまざま。

合宿参加者は、早朝から畑へ直行し農作業を行うことになっている。参加者にも好評で、合宿プログラムに「農作業」を入れてほしいというリクエストも多い。参加者の大部分は都市部の学生なので、ほとんどが農作業には縁がない。早朝の澄んだ空気を胸いっぱい吸い込み、ほんの一時程度ではあるが、代表吉田の農業うんちくを耳を傾けながら除草作業や収穫を楽しむ。

虫に食われた野菜を見ては、「農業使わなかったらこうなるんだ〜。」どこに野菜が植わっているのかわからないぐらいの草に覆われた畑で除草しながら「農業って、ホントに大変だね〜。」「あつ、てんとう虫」なんて叫ぶ声。さまざまな反応が聞こえてくる。

そして、収穫したての野菜を丸かじりしては、「生でもこんなに甘いんだ〜。」など。本来の野菜の味を噛み締めて、みんな笑みが溢れる。

些細なひとコマではあるけど、TICOでは大切な時間である。

▶農業体験のようす



ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方（書き損じハガキ含む）

内藤健晴、ヒラオカ薬局、大久保洋一、中田隆子、後藤田、西愛正、ケーズペットクリニック、唐住洲子、田淵規子、船津まさえ、橋本伸子、藤村美都子、蘭田雄一郎、中島勉・久恵、峰尾武・礼子、能田千春、竹岡サヨ子、佐藤文子、原田栄枝、花井郁恵、紙幸子、新野和枝、Plan-B、さくら診療所、吉田修、匿名1名

会員を更新された方

佐藤知里、寺口カミコ、ダスキン川島、池北洋子、ケーズペットクリニック、中村美恵子、大西和賀、八木正江、原田恵子、垣原宏治、須藤榮子、畑和子、井内一志、大瀧知津枝、町田美佳、田所幸枝、尾崎富美子、特定非営利活動法人アム

ダ、佐藤晃、関野聡美、阿佐哲也、庄田多江、唐住洲子、田淵元樹、富峯康代、古川彩香、後藤田、松田俊太郎、西尾幸郎、佐藤寧子、山本秀樹、山田こどもクリニック、田村幸根、真子多恵、原田栄枝、松田千文、長野晶子、新野和枝、饗場和彦、竹下みどり、萩森健治、瀬戸口千佳、匿名3名

新たに入会された方

原田真理子、小田幸弘、田村聡至、柳崎義美、大久保洋一、金子正憲、中島久恵

●2014年3月25日分～2014年6月30日

●順不同、敬称略

TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO

銀行振込 — 四国銀行 山川支店（店番号344）

普通 0199692

特定非営利活動法人TICO

代表理事 吉田修

カナ入力の場合は、トクヒ）ティコ

募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックして、そこからご購入物していただくと、代金の一部が寄付されます。詳しくはホームページをご覧ください。

書き損じはがきを集めています。

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター“Face to Face”を毎月お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000

正会員 ¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649

加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。

なお、ゆうちょ銀行自動引き落とし、クレジットカード払いも可能です。詳しくはホームページをご覧ください。

TICOニュースレター Face to Face 第37号

2014年7月発行

発行人：吉田 修

編集：近森 由記子

特定非営利活動法人 TICO 事務局

〒779-3403 徳島県吉野川市山川町前川120-4

電話：0883-42-2271（平日 9:30～18:30）

メール：info@tico.or.jp / ウェブサイト：www.tico.or.jp

facebook：www.facebook.com/ticoHQ